

Craig Hooper , CONTRIBUTOR
AEROSPACE & DEFENSE

フォローする



Photo by Ukrainian Presidency/Handout/Anadolu Agency via Getty Images

ウクライナのウォロディミル・ゼレンスキー大統領は、西側をロシア軍に封鎖された首都キエフに留まり、冷静に国民に語りかけている。一方、ロシアのウラジーミル・プーチン大統領は、まるで宮殿のような政府機関の建物の中から、入念に計算された形で、時折カメラの前に姿を現すだけだ。

現在の体制を強化するために使われる“皇帝”のようなプーチンの姿は、ますます不自然に感じられるようになっていく。ゼレンスキー大統領が明らかな虚勢を張ってみせ

る姿とは、まったく対照的だ。

ロシア軍に追われているゼレンスキーは、ヘルメットをかぶり、防弾チョッキを着て、キエフを守る兵士らとともに行動している。だが、プーチンはウクライナへの侵攻を開始して以降、攻撃に投入したおよそ20万人の兵士からなる部隊の前に、一度も姿を見せていない。

プーチンは過去およそ30年間、自らの世間的なイメージを積極的に操り、ロシアにおける新たな理想像を築き上げ、自らをそれに適合させることに力を注いできた。2007年にはカメラマンらを前に、上半身裸でスナイパーライフルを持って歩く姿を披露。

また、ホッケーをしたり、柔道の練習をしたりする姿、小型潜水艦を操縦する姿、子犬たちとはしゃぎ回る姿なども撮影させてきた。第二次チェチェン紛争のときには、ヘルメットをかぶり、自ら爆撃機を操縦してチェチェンに乗り込んだ。かつてのプーチンは、戦時の指導者に国民が期待するすべてのことを、実際にやってみせていたのだ。

だが、現在の過剰に仕立て上げられたプーチンのイメージと、肝の据わった勇敢な行動を取るゼレンスキーの姿を並べてみれば、そこに軋み合うような違いがあることは明らかだ。リアルな存在感のあるゼレンスキーに対し、プーチンは自ら作った豪奢な“ポチョムキン村”に閉じ込められた、残念なフェイクのようだ。

新型コロナウイルスのパンデミックが発生して以来、プーチンは“大衆の味方”のイメージに磨きをかけるための努力を、ほぼ放棄している。

次ページ > “B級映画の悪役”vsヒーローの構図？



こうしたゼレンスキーとの対比ほど、プーチンのイメージにダメージを与えるものはない。危機の中で強さを増すゼレンスキーは、ますます度を越えた“B級映画の悪役”のようになるプーチンを引き立てるヒーローのようだ。

プーチンには「想定外」が続く？

プーチンにとっては、こうした事態は想定外だったはずだ。政治風刺ドラマの高校の歴史教師の役で人気を博し、意外にも大統領に選出されることになったゼレンスキーは、政治ウォッチャーたちからは長い間、相手にされてこなかった。だが、どうやら彼の中には、危機の中で鍛え上げられる鋼のような強い精神力があったのだとみられる。

ロシアの特殊部隊に追われる中でも、ゼレンスキーはキエフからの避難を促した米国に対し、「戦いはここで終わっている。私に必要なのは移動手段ではなく、弾薬だ」と当意即妙に答えた。

決死の状況における大統領のこの冷静さが、ウクライナの人々の団結を促し、生き残りをかけた戦いに立ち向かう中での重大な計算違いや誤りを見通すことにつながったのは間違いない。

従来の見方で判断すれば、ウクライナはロシアの侵攻開始から数日で陥落するとされていた。だが、力強く、士気を高めるリーダー、すべてを賭け、国と苦しみを分かち合うリーダーの存在が、軍だけでなくすべての国民を動かし、戦い続けることにつながっている。

戦いは、現時点ではロシアに有利に動いているかもしれない。だが、2人のリーダーの違いをみれば、今後がロシアにとってより悲劇的であることは確かだ。ロシアの大統領がその威厳ある力を誇示したいまさにその時に、プーチンは自らの新たな弱さを、際立たせている。

